



少

年期より東西医学を深く学び育った医師・明石博高は、医療の振興こそが京都近代化には必要不可欠であると考えていた。そこで、明治三年（一八七〇）には全国に先駆けて種痘館・療病館における検徴（梅）導入に着手、続いて明治四年（一八七二）二月、外国教師を招聘して洋式病院を創設し、併せて医学校を興すべきであると府に申請した。しかしながら、府からはその資金を得る事ができず、時期未だ熟せずという判断が下された。そこで明石は、旧知の岡崎願成寺住職・与謝野礼蔵にかけ合い、また以前ともに御所内病院を管理していた木村得正に、禅林寺（永観堂）前任職東山天華を紹介してもらった。さらに慈照（銀閣）寺住職・佐々間雲巖、鹿苑（金閣）寺住職・伊東貫宗も集め、病院創設の必要性と急務性を訴えた。時期を同じくして、これらの僧侶たちは、廃仏毀釈の風潮と戦乱後の疲弊感の中で社会事業に活路を見出そうと思索していた。したがって、僧侶ならびに明石の思惑は一致、僧侶達が発起人となり、早速、病院建設を府に出願した。明石や僧侶たちは府下各分野からの資金調達に奔走し、一般府民の浄済、管内医師や薬舗からの助資金、花街に課した冥加金等による資金は五万に達したといわれている。京都における近代医療と近代医学教育の幕開けは、このような京都の文化地盤の発展上に開花することとなった。なお、京都療病院の名称は、聖徳太子が悲田院、施薬院、療病院の三院を創設したという故事にならって命名された。ここには、療病院創設のために奔走した僧侶たちへの明石なりの配慮がうかがえる。

新設された療病院に赴任した最初の外国人医師は、オーストリア出身のドイツ人医師ヨシケル・フォン・ランゲグ（F. A. Junker von Langegg, 一八二八〜一八九九）であった。ヨシケルはウィーン大学卒業後の明治五年（一八七二）、日本政府の招きで療病院設立のため来日した。着任後は、同年九月から木屋町の仮療病院で診療を開始し、二月二日からは移転先であった粟田口青蓮院内の仮療病院で解剖学の講義を開始した。さらに二月一日、京都府療病院と

明石博高と近代医療

光平有希



なってからは麻酔学、解剖学、外科学、内科学、精神医学などの講義も担当、同病院での診療、研究、教育の基礎固めに精力的に取り組んだ。

ヨシケルの退任後、後を継いだのはコンスタント・ゲオルグ・ファン・マンズフェルト（Constant George van Mansvelt, 一八三二〜一九二二）である。オランダ出身の予備海軍軍医であったマンズフェルトは慶応二年（一八六六）に来日し、長崎精得館、熊本医学校（熊本藩治療所兼医学校）で教鞭をとった後、明治五年（一八七二）から明治九年（一八七六）まで京都療病院に赴任。二代目外国人医師として、同病院における医学教育の系統化に努めるとともに、療病院長設置の必要性を勧告した。その後、初代病院長には半井澄が就任している。マンズフェルトの後任ハインリッヒ・ポルト・ショイヘ（Heinrich Botho Scheube, 一八五三〜一九三三）は診療研究に熱心な人物として知られ、脚気、寄生虫の研究やアイヌの民俗学的研究において大きな足跡を残した。この三人の外国人医師は、療病院に近代医学を導入し、病院の発展と医学教育に多大な貢献をした。明治二年（一八七九）四月十六日には医学校も併設され、初代校長に萩原三圭が就任、以後半井澄、猪子止戈之助、加門桂太郎、島村俊一と続いた。

明石が進めた医療政策で療病院と並び忘れてはならないのが、日本最初の公立精神病院・京都癲狂院の創設である。明治八年（一八七五）に京都府は岩倉大雲寺における加持祈禱に頼る精神疾患患者治療の改善手段として、精神病院設置に乗り出す。明石らは禅林寺前管長東山天華の協力を得て、南禅寺方丈内に仮癲狂院を設け、岩倉大雲寺等の患者を収容した。開院は同年七月二十五日、初代院長に真島利民が就任、癲狂院は療病院の管轄下でもあったことから、ヨシケルも診療にあたった。経営難のため七年で癲狂院は廃院となるが、このように明治初期の京都では、全国に先駆け身体・精神双方の近代医療体制が整いつつあったのである。

